

「光の道」構想に関する意見

意見提出元	個人
意見項目	意見内容
<p>1. 超高速ブロードバンド基盤の未整備エリア(約10%の世帯)における基盤整備の在り方についてどのように考えるか。</p>	<p>コストパフォーマンスが悪く採算のとれない最後に残された10%あるいは5%といった未整備エリアについては、(利用率を限りなく100%に近づけ得る見通しの保証があることを条件に)国あるいは地方自治体等による何らかの公的支援が必要と考える。ただ、必ずしも光にこだわらずに、以前デジタルデバイド対策としてBWAの周波数割り当て(10MHz)がなされたように今後益々ブロードバンド化する無線通信の利活用も視野に入れてはどうか。特に今年の12月から首都圏等で商用サービスが始まる3.9世代携帯技術(LTE)などを導入すれば、(20MHz帯域幅でピークレート300Mbit/secと)現状の光サービスと遜色のない広帯域伝送が可能になり得る。</p>
<p>2. 超高速ブロードバンドの利用率(約30%)を向上させるためには、低廉な料金で利用可能となるように、事業者間の公正競争を一層活性化することが適当と考えられるが、NTTの組織形態の在り方も含め、この点についてどのように考えるか。</p>	<p>アクセス網を分離独立させる話が出ていると聞く。一見合理的な考えに見えるが、果たして競争のない世界に戻して健全な発展が望めるのだろうか。逆に、熾烈な世界的な競争から取り残され、発展が阻害される可能性があるのではないかと危惧される。現在携帯電話の世界ではLTE, WiMAX, 更にはIMT-Advancedと熾烈な世界的競争が行われている。そこでは、バックボーンとしての光ファイバ網のみならず、光ファイバで結び付けられた張り出し基地局や分散アンテナ基地局、基地局連携送受信技術など、光ファイバと切っても切れない新技術が切り札となりつつある。FTTHの先に簡易携帯基地局を設けるフェムトセルも注目を集めつつある。このように今後光ファイバと無線技術の結びつきは益々強固になるが、その技術展開を阻害しないように留意することが不可欠である。その点からも、やはり現状通り、競争が必要と考える。実際、関西地域ではNTT西日本とケイ・オプティコムの間で健全な競争が行われており光ファイバの敷設整備は順調であると聞いている。</p> <p>一方、その利用率が低いのは料金が高いからではなくて魅力的なサービスの欠如が主因ではなからうか？(実際、ほとんどの世帯で携帯電話の総支払額は光ファイバを利用した場合の支払い額を上回っているのではなからうか？)エンターテイメントだけでは利用のインセンティブは限定的である。やはり、教育や医療、そしてヘルスケアなど国民が是非とも使ってみたい魅力あるサービスをネットで提供することが不可欠であり、そのためには現在バリアとなっているさまざまな規制緩和を実施する必要があるのではなからうか？個人的に電子政府にも大いに期待しており、</p>

確かに確定申告の際の申請書類作成支援システムは便利であり毎年活用しているが、e-TAX のほうは何度か活用を考えたが（多忙な時期に敢えてそれに挑戦するメリットが見出せずに）その度に諦めた経緯がある。もう少し国民の目線に立った利活用の促進策こそが現在最も期待されていると考える。

なお、iPhone (iPodTouch)や iPad の登場は衝撃的であった。このような使い勝手の優れた端末に、魅力あふれるアプリが搭載されれば、ブロードバンドを利用してみたいと考える国民が一気に増えるのではなかろうか？（この場合、国民にとっては、リーズナブルな価格で使えさえすれば、通信媒体は光ファイバであっても広帯域無線であっても、どちらでも構わないと考えられる。）